

土木を伝える

インフラの広報とは何であろうか。私自身は広報を専門的にやってきたということはないのだけれど、常に「広報」に近い立ち位置にいたと思うので、私の経験や思うところをつらつらと書いてみようと思う。

私はもともと土木の出身ではなく、社会工学科の出身で、その中で専門は景観工学や都市計画史であった。景観工学の対象にインフラのデザインがあるとはいえ、土木との接点はあまりなかった。ただ、学部生のころの授業で国土基盤整備概論のような名前の授業があり、それぞれのインフラの目的や、どのような調査を経て計画されるのかというようなことを習ったのを覚えている。内容については記憶があいまいであるが、とても面白かった記憶がある。専門教育をほとんど受けたことのない学生にとって、それぞれのインフラは、単に生活の背景であり、「存在して当たり前」のものだが、それらがしっかりとした理論や目的を持って「人によって作られている」というところに新しい気づきがあったのだ。

その後、最初の就職で土木の学科に所属したことで、土木に積極的にかかわるようになった。それ以前も土木に隣接した分野にいたとはいえ、土木の世界に入った当初は少なからずカルチャーショックがあった。なかでも学生がインフラにあまり関心がないことには驚いた。学生時代は景観の研究室にいたこともあって、橋、広場やまちなみなど、いろいろな整備が行われたと聞けば、それを見に行くのが普通環境であった。

しかし、私が最初に出会った「土木の学生」は、インフラを作るための部分の技術は一生懸命学んでいるが、その総体であるインフラには関心がない。規模が大きく、長く使われるインフラは、生活を支えるのみならず、その土地の環境となり風景となる。多くの学生は土木系の公務員、建設コンサルタントやゼネコンに就職し、それぞれの地域のインフラを作る仕事に携わるが、自分が学んでいる技術が、空間の中にひとつのインフラを作るためのものであるということまであまりイメージできていないように感じた。

そこで、私の「景観工学」の授業では、インフラの目的、構造的要素、周囲の環境との関係などから「それがそこにある理由」を理解し、インフラに関心を持ってもらうことを目標にした。技術の総体であるインフラに関心を持つことが、技術者と市民の溝を埋める第一歩であると思ったからである。

この話は、土木の広報にも通ずる話ではないだろうか。インフラは、人々の生活を支える明確な目的を持っており、その形や立地には理由がある。多くの人にとって、そのような説明は面白いと思ってもらえるはずだ。私が学部生のころに習った授業を面白いと思ったように。

「広報とは」と大上段に構えるよりも、まずは広報をする側が、インフラそのものに関心を持ち、たくさんの「へえ～」を集めることをお勧めする。

話は少し変わるが、令和6年に土木学会は110周年を迎え、その記念事業に幹事長として関わった。記念事業のひとつとして、「伝わる土木、

東京科学大学 土木・環境工学系 教授 ^{さなだ}真田 ^{じゅんこ}純子



伝える土木」という企画を行った。各社、各団体が行っている伝えるための事業を、その伝え方の工夫に注目して集め、広報の参考にしてもらおうと企画したものである。最終的には多くの面白い事例を応募してもらえたが、事例を収集する中で「規模の大きなものを見せれば関心を持ってもらえるはず」という考えも根強いと感じた。確かに大規模な工事は一時の関心を呼ぶかもしれない。しかし、「伝わる」かどうかは別問題である。事例の中には構造物の仕組みを模型などで説明するものもあり、相手の理解を単純化せず、専門的なことでもわかりやすく伝える熱意が重要なのだろうと思った。

さて、ここからは私が行っている「石積み学校」の取組を紹介したい。私は柵田や段畑の石積みに出会い、平成21年に石工に技術を習い始めた。農地の石積み技術は、かつて中山間地域の農家にとって「普通の技術」であったものの、現在では全国的に石積みの技術が失われかけている。これをまた「普通の技術」にするために、石積みの技術を気軽に習うことのできるワークショップを日本各地で開催している。

コツさえ掴めれば誰でもできるということ、自然物だけを使う持続可能な工法であることを広く知ってもらうため、活動のほかに広報にも力を入れてきた。会の告知や募集に当たっては、設立当初からFacebookを用いて行ってきた。発信に当

たっては、「組織として」発信することを心掛けている。SNSを個人的なものにしてしまわず、参加者との内輪の雰囲気を作らないようにすることで、参加したことはないけれども応援するという人も多くいてくれて、そうした人から情報をもらって参加したという人も少なからずいる状況である。

近年は都心のイベントなどで卓上のミニチュア石積みの体験会なども行っている。石積みの現場に来てもらうのはやはりハードルが高いので、こちらから出かけていくスタイルである。積む石は拳よりも小さいが、それでも十分に楽しさが伝わるようで、そこから石積みに興味を持ってくれる人もいる。また、初めて積んだ石積みでも案外強いことに驚いて、適当に見えても確立された技術なのだと認識する人もいるようである。

そのほかには、若い世代への技術の継承として、令和5年から高校生を対象とした「石積み甲子園」を開催している。競争することによるイベント性によって、より広い層に石積みの価値を伝えることができるほか、応援する人が「石積みを見る目」を持つことにも期待している。石積みを見る目を持つ人が増えれば、高い技術が継承できるからである。

また、最近ではもっと若い世代向けに「ずかん石積み」という図鑑の監修も行った。小さな石積み博士が登場したら楽しいだろうなと思っている。

以上のように、私自身もあの手この手で石積みを伝えるべく、試行錯誤している。

【著者紹介】真田 純子（さなだ じゅんこ）

平成17年東京工業大学博士後期課程修了、博士（工学）。徳島大学工学部建設工学科助教、東京工業大学環境・社会理工学院土木・環境工学系准教授を経て現職。平成27年にベネチア建築大学客員研究員。専門は景観工学、都市計画史、土木史、石積み。主な著書に『誰でもできる石積み入門』（農文協、土木学会出版文化賞）、『風景をつくるごはん』（農文協、日本造園学会著作賞、辻静雄食文化賞）がある。